1933 ▸▸ 1945
昭和8年 ～ 昭和20年

石炭化学コンビナートの成立

インジゴの成功は、三井鉱山内部の化学事業への評価を一変させ、合成染料事業の拡充のみならず合成アンモニア・化学肥料事業を拡大させた。
この頃硫安の需要が大幅に伸びていたことから、1933（昭和8）年に、国の産業奨励を受けて「東洋高圧工業」を設立した。
東洋高圧工業は、硫安増産のために原料を効率の良いコークスそのものに転換し、大規模なアンモニアプラントを三池染料工業所のコークス炉に隣接して建設した。
またアンモニアと反応させる硫酸を横須の三池製煉所（現在の三井金属グループ）より調達していたことから、硫安プラントは同所に隣接して建設した。

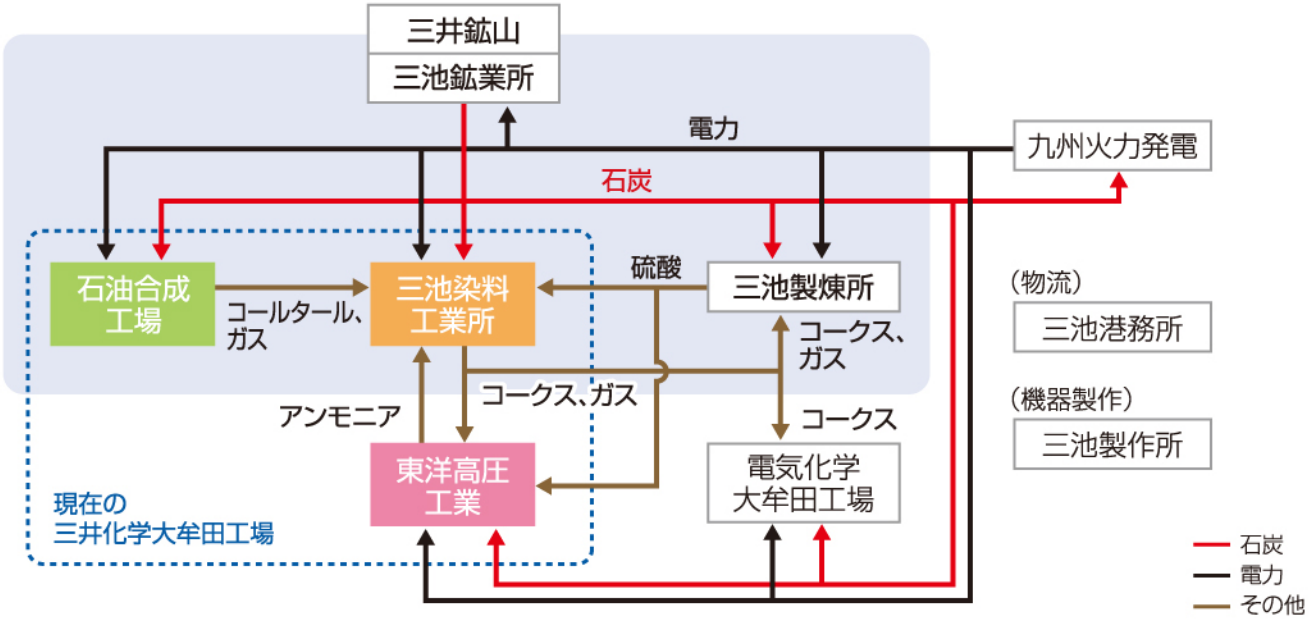
こうして大正から昭和初期にかけて三井鉱山の三池地区*に多くの工場が建設されていった。

＊現在の福岡県大牟田市と熊本県荒尾市にまたがる地域

その中核であり三井鉱山の一部門であった三池染料工業所は、1941（昭和16）年に「三井化学工業」として独立した。
その従業員数は、1926（昭和元）年の約千人から1940（昭和15）年には約1万人に膨れ上がっており、朝夕の通勤時は西鉄の栄町駅から北門、正門まで人が数珠つなぎになった。
1943（昭和18）年に設立した石油化学の礎ともなる「三池石油合成（後の三池合成工業）」も含め、三池地区における「石炭化学コンビナート」（下図参照）は昭和10年代にその姿が完成の域に達した。

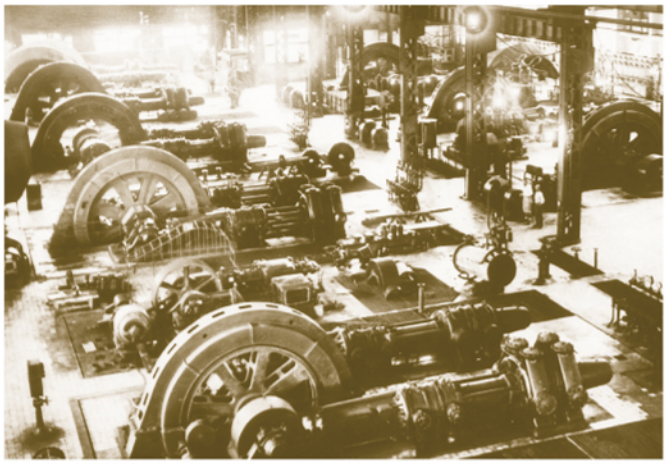
しかし石炭化学コンビナートが隆盛を極めた矢先に、日本は太平洋戦争に突入した。
大牟田工場は軍需の色を深め、染料・医薬品も軍需品が主力となり、「三池石油合成」では航空機用燃料（人造石油）の製造を行った。
1945（昭和20）年6月以降、大牟田に空襲が相次ぎ、同年8月の爆撃により工場は機能を停止し終戦を迎えることになった。

〈三池地区における石炭化学コンビナートの生産関連図〉
－1940（昭和15）年－

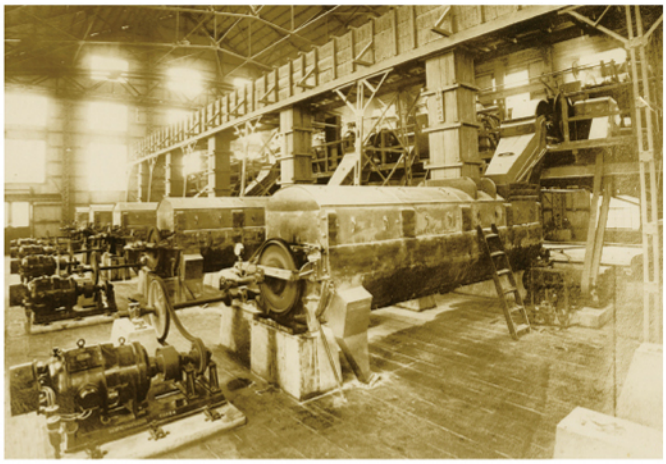


三井鉱山 三池染料工業所 全景／1937（昭和12）年

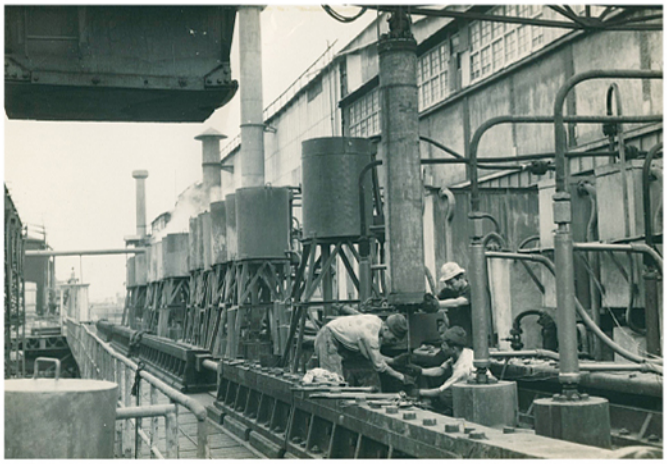
東洋高圧工業 大浦工場 全景／1934（昭和9）年



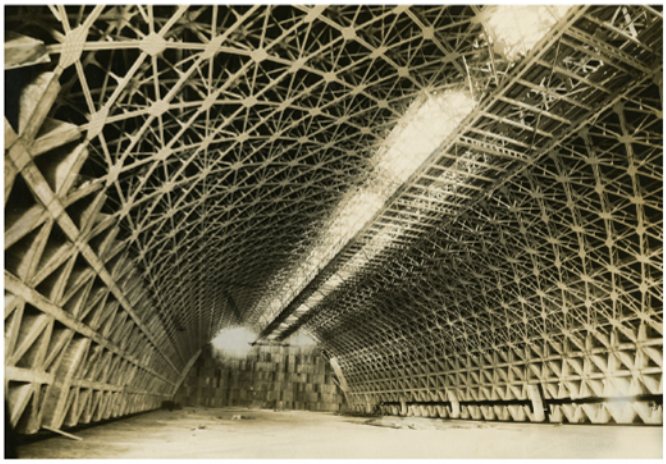
東洋高圧工業 大浦工場 アンモニアプラント（ガス圧縮機）／
1935（昭和10）年



東洋高圧工業 横須工場 硫安プラント／1935（昭和10）年



アンモニアプラント（アンモニア合成管）／1935（昭和10）年



完成直後の硫安倉庫／1934（昭和9）年

1943（昭和18）年に設立した三池石油合成

Copyright(c) Mitsui Chemicals, Inc. Omuta Works All Rights Reserved.